

第三節 突騎施 (Türgis) の文字

回鶻文字がソグド文字を少しく變化したる形を以てトルコ族の間に行はるゝに至りし時代の何時なるかにつきては、從來精細に之を定め得たるものあらず、Radloff 氏の論ずる所を見るに「回鶻文字が何時成立したるかにつきては證據の存するものなし、されど吐魯番の發掘物が示せるが如く、八世紀の後半に於ては此の文字は書籍用の文字として使用せられたるものなり、又喀什噶爾に於て Lavrov 氏が購求せる貨幣に支那風の銅貨ありて、其の一面には回鶻文字にて、



(Türgäš *Karan bir kashi*) 即ち ein Käsch

^⑯(突騎施可汗) des Türgäsch Kaghan と記せるものあり、されば此の貨幣は明らかに八世紀の初半に鑄造せられたるものにして、之亦當時東トルキスタンの北方に於て、此の文字が公用文字として用ゐられたるを示せるものなり云々」

と記せり、吐魯番より發掘せられたるトルコ語の文書には余の知れる限に於ては、八世紀の日附を有するものあらざれば、氏が如何なる資料によりて回鶻字が當時書籍用の文字として用ゐられたるを斷じたるかは知る由無けれど、然も此等の文書中には、遅くとも八・九世紀頃に書かれたるものあるべきは、一般に認めらるゝ所にして、^⑰ Le Coq 氏の如きも一九〇八年、所謂回鶻文字にて記せる摩尼經典の断片を解説するや、之を以て唐代(六〇〇—一九〇〇)のものと考へざる可らずと説けり、此等の人々の認むるが如く、唐代殊に八世紀時代に於て既に此の文字の確かに用ゐられたるものなることは、實に前記の突騎施可汗の貨幣によるも疑ふ可きに非ず、此の貨幣は Müller 氏も既に一九一一年 ^⑱ *Uigurica* に於て解説したる所にして、余も亦明治四十五年初めて羅振玉氏所藏のものを實見し、其の